



日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2004.10 第17号

協会の法人化実現に寄せて



SPF豚の 過去・現在・これから

●塩田 忠

農林水産省生産局畜産部
畜産振興課長

SPF豚は、今では消費者にしっかり定着しています。かつて、量販店の店頭でSPF豚のラベルが貼られ、初めはSPF豚が何かわかりませんでした。次第に特別な飼育方法をした豚で、美味しい豚肉の代表として差別化されるようになりました。この間、混乱もあったようですが、それらを正すため日本SPF豚協会では、SPF豚生産の認定農場制度を立ち上げ、生産サイド自ら信頼を勝ち得てきました。

今夏、久しぶりにお会いした赤池会長から、本稿の依頼があった時、ふと、これまでの出来事が次々とよみがえってきました。

堅実かつ継続的な努力の結果として、SPF豚はその地位を確立し、これまでの関係者の取り組みはしっかりと評価されてきました。それでもまだ、流通段階でコンベと混ざるなど課題は尽きることなく、今回、日本SPF豚協会が法人化され、新たなスタートを切ることとなったことは大きな意味があると考えます。

我が国国民の食生活が変化する中、牛肉の需要が拡大する一方で、豚肉については、加工品のバラエティ化が進むなどにより需要が堅調に推移してきましたが、輸入の増大もあり国内生産のシェアは50%近くになりました。

そうした中で国産豚肉は、銘柄化、黒豚など「国産」をアピールし、その名前とともに味の良さを求めてきました。

美味しい豚肉の取り組みとしては、

- ① SPF豚に代表される特別な施設と肉豚生産
- ② 疾病対策の徹底
- ③ 豚の体質的強化及び施設の衛生管理

に大別され、それぞれ特徴があるものの、「元気ですくすく」を共通のポイントとしています。生産サイドによるこうした取り組みが、度重なる疾病との戦いを克服し、国産豚の継続的な提供を可能としてきました。

これからも、生産段階では、我が国の気候風土に合った、消費者の嗜好に合った豚肉生産に向け、飼育管理だけでなく、種豚の改良・確保、環境対策、衛生管理などの面でさらなる努力が求められます。

また、肉質面での特徴等科学的見地を加え、その特質をアピールすべく、消費者に対しより正確かつ的確な情報を付与していくことが求められています。

現在、「食料・農業・農村基本計画」を見直しており、国際化に対応すべく国内の養豚も一層の体質強化が望まれている中で、SPF豚関係者にはさらなる活動の活性化を目指した組織の強化とともに、他の養豚関係者との連携を密にし、一体となって消費者に安定的に、かつ安心な国産豚肉を提供していかれることを期待してやみません。



消費者と 向かい合う協会に

●本田 英三

日本SPF豚協会第2代会長
住商飼料畜産(株)代表取締役社長

まず、わが国におけるSPF豚の歴史をひもといてみましょう。1965年、農林省(当時)家畜衛生試験場の波岡先生の呼びかけで、最初のSPF豚研究会が結成されましたが、参加者は飼料メーカー、薬品会社、商社等数社に過ぎませんでした。それは、第一にはSPF原種豚から肉豚の出荷まで多額の費用と年月を要すること、第二に日本全国細菌に汚染されている土地で、果たしてSPF豚の飼育が可能かという疑問があったからです。しかし、実験的に栃木県の鬼怒川農場、福島県の浪江農場が新設され、記念すべき第一歩

が踏み出されたのです。

問題がなかったわけではありません。第一の関門は、primaryの作出設備が家畜衛試にしかなかったので、1、2回は利用させてもらえましたが、民間の利用はその後できなくなったことです。そこで急遽、米国ネブラスカ州立大学のG. A. ヤング博士を訪ね、作出手術から育成に至るまでの指導を受け何とかこの事態を乗り切ることができました。

第二の関門は、当時の生産の主流はランドレース×大ヨークシャーでしたが、病気多発の懸念があったためSPF豚にはデュロック種を交配することにしたのですが、農林省畜産局の一部の人の反対で輸入できなかったことです。次々と障害が発生しますが、とにかくSPF豚のprimaryは誕生しました。

しかし、SPF豚が認知されたかというとはそうではなく、行政の一部の反対もあって学会会議等で話題にはなりましたが正式には採用されず、10年間は試行錯誤の連続で苦難の日々が続きました。

その後の20数年間はシムコ、全農の参入により多くの農場が新設され、SPF豚の飼養母豚頭数も全国の飼養母豚総頭数の15%を超えるようになりました。こうなると世間の評価も高くなり、農場認定制度によってSPF豚の基準が定着しました。

一方、協会は従来どおりの倶楽部的存在でよいのか、という問題が生じます。トレーサビリティの追い風によって脱皮する機会がめぐってきたのです。自由な事業を展開し、あるいは協会自身が諸契約の当事者となって締結し、行政からの補助の受け皿となる、つまり法人格の協会に衣替えする適当な潮時がやってきたのです。

協会の法人化は永年の夢であり、それがかなったのですから、新しい協会として、契約の当事者として消費者と向かい合うことを考えてはいかがでしょう。事務局の拡大も必要でしょうが、この夢を膨らませてください。法人化おめでとう、と申し上げます。



関係各位の努力で 永年の夢が実現

●波岡 茂郎

日本SPF豚協会認定委員、前同委員長
北海道大学名誉教授

このたび日本SPF豚協会が有限責任中間法人という公的な顔を持つに至ったことは、まことに時を得た

快挙であり喜びにたえません。

思えば、新しい技術で生産性の高い養豚発展のためにと当協会が設立されたのが1968年（昭和43年）でした。当時の時代背景を振り返ってみますと、数年前の東京オリンピックは大成功、新幹線が東京—大阪間を3時間で走り、東名・名神高速道路も間もなく完成、また大阪万博が1970年に開催されようとしており、日本は神武景気に酔いしれていました。市民の所得が倍増するに従って、動物たんばくの摂取量も倍増し、敗戦直後常時頭数わずか8万頭だった豚生産も800万頭と、まさに100倍にも増加し、海外からの大型種豚の輸入も激増しました。

しかし、当時わが国の養豚の受け皿は旧態依然たるもので、零細な家族・副業養豚家約22万戸が低い技術レベルで生産しており、海外からの輸入豚によって持ち込まれた種々の厄介な疾病に悩まされていたのです。

日本SPF豚協会はこの状況を打破し、高いレベルの養豚技術の普及をめざし活動してきましたが、旧来の考え方からの転換は容易ではありませんでした。

しかし、1980年代になって転機が訪れたのです。養豚家もSPF豚の有用性に気づき、消費者も食の安全・安心とうま味に敏感になってきました。ただつくればよいという時代は去ったのです。そしてこの頃から1990年代にかけてHACCPとかトレーサビリティあるいは特定JASなど食材への管理システムが強化され、数年前には内閣府に食品安全委員会という独立機構が設立され食材の安全に一層睨みをきかせるようになりました。

このような世の中の趨勢はまさに日本SPF豚協会が設立当初から掲げていた目標そのものです。しかし、当協会はわが国にかつてなかった性格のゆえに既存の枠内におさまらない部分があって、法人化の実現には幾多の困難がありました。このたび数年前に制度化された「有限責任中間法人」としてスタートすることになりました。これによって当協会は公的な立場で所轄機関、生産者、流通などに対応することができ、大きな力が与えられたこととなります。なお、今回の法人化に関する詳細は本誌第16号（2004年7月発行）を参照していただければ幸いです。

当協会の運営・発展と、わが国におけるSPF豚生産の向上は、現在まで約20年の長きにわたって協会会長の職にあつて大変な努力をされてきた赤池洋二氏とその協力者によること大であります。ここに関係各位に心からの敬意を表し、今後の発展を期待する次第です。

国産SPFポークセミナーのご案内

—協会法人化記念 トレーサビリティシステムの構築—

当協会は昭和43年の創立以来、法人化を悲願としてきましたが、今年になって、ようやくそれを実現することができました。今年度の「国産SPFポークセミナー」は、協会法人化後初のイベントとなります。

さらに、今年（社）農協流通研究所が実施する「平成16年度トレーサビリティシステム普及活動支援事業」の支援金の交付が決定いたしました。

そこで、今回のセミナーを「有限責任中間法人日本SPF豚協会」設立記念事業の一環と位置づけて、**セミナー参加費を無料**とし、東京を会場に流通関係者や一般消費者、その他多くの方々に参加を呼びかけることにしました。

まず基調講演においては、消費者の側からトレーサ

ビリティに関する要望や期待などを出席者に直接語りかけてもらいます。

次に昨年（松山大会）の内容を一步進めて、トレーサビリティシステムの実施例をとりあげます。今般法制化されるトレーサビリティシステムは流通段階に何を求めているのか、どこに問題がありどこまでできるのか、また、消費者がどのような情報を求めているかなどを踏まえて問題提起としたいと思います。

シンポジウムでは生産から消費に至る各界の代表に登壇いただき、システム構築上の問題点について意見交換と討論を行い、相互理解を深め、同システムの構築促進につなげることを目指します。

要領は下記の通りです。ぜひ、ご参加下さい。

開催日時 平成16年11月9日（火）13：00～17：00

開催場所 JAホール
（東京都千代田区大手町 JAビル9F）
別紙申込書の地図をご参照下さい。

大会委員長 吉田 修作
および総合司会 （全農畜産サービス(株)常務取締役）

セミナープログラム（敬称略）

- ・開会・大会委員長あいさつ 13：00～13：05
- ・会長あいさつと
有限責任中間法人設立の報告 13：05～13：15

第一部（座長 林 哲）

<基調講演> 13：15～14：15

消費者が望む食品の
トレーサビリティシステム

神田 敏子（全国消費者団体連絡会事務局長）

<トレーサビリティシステムの実施例> 14：15～15：15

- ・レクスト→ジャパンミート→一号館の例
笠原 典子（伊藤忠飼料(株) 食品企画開発室）

- ・ポーランドの例
豊下 勝彦（有）ポーランド代表取締役）

第二部（座長 吉田 修作）

<パネルディスカッション> 15：30～17：00

トレーサビリティシステムの構築と問題点

パネラー予定者：生産者、食肉市場、売参人
小売業各代表

セミナー会費 無料

レセプション（懇親会）のご案内

セミナー終了後、同ビルのJAレストランにてレセプション（懇親会）を開催いたします。毎年ご好評いただいているSPF豚肉のしゃぶしゃぶや加工品も多数をご用意する予定です。SPF豚肉のおいしさをご堪能ください。

開催時間 17：30～19：30

開催場所 JAレストラン（JAビル9F）

会費 5,000円

●申し込み方法

参加ご希望の方は同封の参加申込書にてFAXまたは郵送でお申し込み下さい。

なお、セミナー会場には余裕がありますが、レセプション会場は昨年より手狭ですので、**申し込み先着180名**で締め切らせていただきます。お早めにお申し込み下さい。

申込期日 10月末日

<お申し込み・お問い合わせ>

日本SPF豚協会

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-2-6

産広美ビル7F

TEL 03-5283-5021

FAX 03-5283-5022

e-mail：j.spf.a@nifty.com

溶血性レンサ球菌症

全農家畜衛生研究所 岡田 宗典

一度農場に侵入するとなかなか治らない、あるいは周期的に発生して悩まされる病気がいくつかありますが、その中のひとつに溶血性レンサ球菌症（溶レン菌症）があります。

溶レン菌症の原因菌であるストレプトコッカス・スイスは、多くの哺乳動物に感染し、人にもまれに感染します。ストレプトコッカス・スイスは、35の血清型に分けられますが、その中で血清型2型が最も多く分離されます。

生後数日以内の子豚の扁桃に容易に定着し、通常は保菌していても発症することはない、明らかに健康な豚の扁桃からも分離されます。このことから、この菌の豚への早期の定着と病気の発生とは関連していないようにみえます。

しかしながら、離乳、輸送、温度差、高湿度、換気不良、飼育密度などのストレス、あるいはPRRSなどの混合感染が引き金になり溶レン菌症を発症し、保菌豚が感染源となって同居豚の間に病気が広がります。特にPRRS陽性農場では、継続的に発生する傾向があります。

溶レン菌の発生は、授乳期から肥育期まで幅広いのですが、3～12週齢で最も多く、豚群の中でポツリポツリと発生（稀に大量発生）します。

急性敗血症を起こした場合は症状を示さずに突然死あるいは発熱、呼吸困難、皮膚が青黒くなるなどの症状を示します。

髄膜炎を起こした場合は発熱と神経症状が主で、歩行困難に始まり、遊泳運動や痙攣など特徴的な神経症

状を呈し、急性経過で急死します。また、跛行、運動失調を起こし、経過の長いものでは関節炎がみられ、耐過した豚では肢をひきずる豚がみられます。この場合長期間にわたり発生が続きます。

一方、特別な症状はみられないものの心内膜炎を起こした場合、と畜検査で発見され廃棄処分となります。このような症状は、トキソプラズマ病・豚丹毒・オーエスキー病・豚コレラ・グレーサー病・浮腫病などにおいても認められるため、類症鑑別が重要となります。

信頼できる血清診断法などが実用化されていない現在、臨床症状、発生状況などによる診断が一般的で、溶レン菌の分離や病理検査により診断が確定します。

溶レン菌症のワクチンは実用化されていないため、抗菌剤の予防的投与および消毒、オールイン・オールアウトなどの飼育管理が重要であり、ストレスを与えないことが発症を抑える鍵となります。離乳後のペニシリン系薬剤の投与が有効で、特にアンピシリンが効果的です。しかしながら、重度な症状を呈したもの（神経症状を呈したもの）には治療効果は期待できません。

また、溶レン菌には一般的に使用されている消毒薬が有効なので、適正な消毒による予防効果は大きく、分娩舎・離乳豚舎のオールイン・オールアウトと消毒の徹底、飼育密度の適正化、十分な換気などの飼育管理の改善が大切です。そしてPRRSなどの混合感染を防ぐことが重要です。

このように、溶レン菌症は根絶が難しいため、対策を立てる場合、病気をうまくコントロールすることが基本になります。

糞尿処理問題を考える ①

伊藤忠飼料(株)研究所 竹内 拓朗

本年11月の家畜排せつ物法の完全施行により、糞尿の管理が厳しくなるとともに、処理施設も整備して管理しなくてはなりません。期限を過ぎた時点で、不適切な状態にあると、罰金の処罰の対象となります。ただし、この法律の主旨は、健全な畜産業の発展を目指す上でこれまで曖昧な部分もあった糞尿処理・利用を見直すことが目的なので、罰金を払えばよい、ということではありません。持続型農業を行う上で、環境問題は重要課題なのです。そこで、4回シリーズで糞尿処理のポイントについて書きますので、内容は基本的なことですが、皆様のご参考になればと思います。

浄化槽に負担をかけていないか？

あらゆる施設、設備には施設設計・運転計画があります。それは污水处理施設も例外なく存在し、計画値を超えた条件（頭数、汚水量、糞尿分離率等）では、浄化処理が十分に行われません。特に、増頭、雨水流入、除糞スクレーパーの損耗による糞尿分離率の低下等で浄化槽に負担をかけている例がよくあります。設計書をもう一度見直すとともに、設計・計画数値内の運転を心掛けましょう。

機械・装置のチェックは行っていますか？

家畜排せつ物法でも規定されていますが、固液分離機や曝気装置、脱水機等の機械・装置をチェックし、浄化処理に支障をきたすような故障があれば、修理しなくてはなりません。故障を放っておくと、浄化が十分に行われなればかりか、正常な他の機械に悪影響を与える可能性があります。定期的なメンテナンスを行うと共に、おかしいな、と思ったらすぐに調べてみて下さい。

活性汚泥・処理水の日常チェック

汚水の浄化は主に微生物によって行われており、浄化槽はいわば生き物であり、人間と同じように、健康状態は日々変化します。日常的な観察により、変化をより早く発見することが肝要であり、異常の早期発見につながります。以下の項目は、日常的にチェックするようにしましょう。

① 活性汚泥の色、臭気、泡の発生

色は黒褐色であれば良好であり、灰色から黒色であると曝気不足です。臭いは無臭もしくはわずかな土壌臭です。アンモニア臭や嫌気発酵による腐敗臭がする場合は対策が必要です。発泡は連続式処理であれば第1～2曝気槽、回分式では曝気開始直後では通常でも伴いますが、曝気の進行により減少します。泡が水面を覆うほど発生している場合や、常に発生している状態は異常です。

② 汚泥の沈降分離（凝集）状態

汚泥の沈降具合は、1リットルメスシリンダーに汚泥液（曝気終了に近いもの）を入れ、30分間静置することにより知ることができます。汚泥が沈降分離しない場合は、沈殿槽で放流水に汚泥が流出している可能性が考えられます。

③ 処理水のpH、透視度

処理水のpHが7±0.5から外れるようであれば、注意が必要です。酸性側であれば、硝酸の蓄積が考えられ、アルカリ側であればアンモニアが残っていると考えられます。リトマス試験紙で測ることができます。

養豚廃水の処理水の透視度は、水質と相関性が高く、処理状況を知ることができます。目安としては15cm程度です。（編集部注：今号より執筆者が交代いたしました）



やっぱり好きでした

(有横山養豚 横山 利佳)

戦後、何にでも興味を持ち、常に新しいことに挑戦してきた祖父が養豚業を始めました。父もまたその血を受け継ぎ、オゾン脱臭や餌に炭を入れるなどのさまざまな工夫をしながら、養豚業を続けてきました。

元々両親の働く姿、自営の大変さを見てきた私は、短大2年生の5月に「私を使ってください!」と父に頼みました。「本当にできるのか?」と聞かれ、「やってみなくてはわかりません。でも、がんばります」といいました。これが私の“豚人生”の始まりです。私を含め、本当にできるのだろうか?、どうせ、甘えてしまうのでは?と家族中が心配していました(笑)。

入社前は、人の出入りが激しいため日々忙しい母を少しでも助けたいと、事務と現場を半分ずつこなすつもりでしたが、そんな甘い気持ちはへし折られました。good timing!とばかりに、従業員が一人退社することに。半年前から少しずつ学んでいた分娩担当から育成担当となりました。女性は分娩舎という頭しかなく、妊娠鑑定なども学びながら準備していた私は、不安い

っぱいで入社することになりました。

あっという間に半年が過ぎ、父から新たな指令が!「獣医の先生からヘルニアの手術を習え」とのこと。それから約2か月、仕事の後週1回の勉強会になりました。

そのころは去勢もしたことがありませんでした。「私が切ったら、この子は死んでしまうかも」とメスさばきにためらいのある私に、先生は「多少の犠牲は仕方がないよ。それで上手くなるのよ、利佳さん」とやさしく指導してくださいました。このとき初めて、生きものを飼うということの、違った一面を知りました。今でも親子三代、先生にはお世話になりっぱなしです。

この業界に入るまでは、あまりやり遂げたという実感もなく、父を人としてすごいと思ったこともありませんでした。しかし、私の性格を考慮した上で次々と課題をくれた父と、その課題克服に協力して下さった先生方のおかげで大きな自信を持つことができました。

はじめは豚にはね飛ばされて出荷もできなかったもので、あまりの情けなさに一人涙することもありました。入社から2年半が経った今ではすっかりマッチョ(!?)になりました。これからも、勉強を重ね今までの経験をむだにしないよう、父と一緒にがんばっていきたいと思います(婚期を逃さない程度に…(笑))。



S P F 豚農場認定に向けて

(有伊藤養豚飯岡農場 伊藤実千子)

千葉県の東部、東京電力の風車が立ち並ぶ中、「風の谷」とも呼ぶべき地に、私達の農場はあります。

昨年9月の着工から、建設と並行しての種豚の導入。そして、今年末の出荷とS P F農場認定を目前に、販売先を検討するところまで、ようやく辿り着くことができました。

母豚200頭一貫の、ワンサイトに増頭計画まで。予算の厳しい中、開放式豚舎と最小限の設備によるS P F対応は、S P F農場を見たことすらない私の連れ合いの手で、基本計画の配置から事務所の間取りや細部までを計画してきました。

現在、農場スタッフは3名に事務の私の計4名。全員

が経験の浅いメンバーのため、「餌から管理まで、各業者やメーカー、獣医さんに教わりながら全員で試行錯誤していこう」という方針で進められ、事務員のレベルアップも要求されてきます。

微力なだけに、農場の立ち上げには私達の力だけでは越えられない多くのハードルもあり、その度にたくさんの方々との出会いに助けられ、道標を示していただきました。

日本S P F豚協会の向かうべき本質と信用について、赤池会長に教えていただいたことは、とても貴重な経験でした。

S P Fならではの美味しい肉づくり。それを目標に未熟な私達ならではの方法と歩みで、一歩ずつ上を目指していきたい。「辛い仕事も楽しみも全員で」そんな思いが多くのの方々のお力添えのもとに、大きな和と大きな力に変わっていくことを願い、これからも和の中の一人として、農場を支えていきたいと思っています。

● 協会からのお知らせ ●

● 東京のポークセミナーにぜひご参加下さい

本号2ページでご案内のとおり、今年の協会主催「国産SPFポークセミナー」は11月9日(火)、東京・大手町のJAホールで開催されます。念願の協会法人化を記念し、消費者も含め広く一般の方々に協会の取り組みを知っていただくよい機会になればと思います。セミナーの参加は無料ですので、会員の皆さんには、ぜひ関係者、お知り合いに声をかけていただいて、お誘い合わせの上ご出席いただきますよう重ねてお願いいたします。申し込み用紙や今号の予備は事務局に用意しております。また、協会としても広く周知、PRに努めたいと思っております。ご不明な点などありましたら事務局までお問い合わせください。多くの皆さんのご出席をお待ちしております。

● 生産情報公表JASの説明会が全国で開催

会員の皆さんの関心も高い生産情報公表JAS規格、今年から豚肉も施行されました。

そこで、10月から11月にかけて全国6か所で生産者を対象とした「生産情報公表豚肉のJAS規格」説明会(財団法人食品産業センター主催)が開催されます。詳しい日程等の案内は同センターのホームページに掲載されていますのでお早めにご覧の上ご参加下さい。一

番早い開催は10月12日の東京です。協会でもご案内いたしますので、お気軽にお問い合わせ下さい。

● 協会法人化について

協会の念願である法人化がまもなく実現いたします。9月末現在、定款の公証役場の認証も終え、金融機関への基金委託の手続き中です。10月中には法務局への登記をすませ、「有限責任中間法人日本SPF豚協会」としてスタートいたします。セミナーをその御披露目の場としたいと考えております。

● 『だより』のご意見、感想を募集します

編集部では「会員/読者のページ」を設け、会員の皆さんの声を反映した誌面づくりをめざしています。『協会だより』の感想、意見はもちろん、協会への要望、疑問・質問、エッセイ等々、ぜひお寄せください。また、協会ホームページに掲載する写真、イラストなども募集しております。方法は郵送、FAX、eメール等、何でも結構です。お待ちしております。

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-2-6

産広美工ビル7F

日本SPF豚協会事務局

FAX.03-5283-5022 TEL.03-5283-5021

e-mail : j.spf.a@nifty.com

● 認定情報 ●

● 平成16年度認定農場

[9月認定](有効期間:平成16年9月9日から17年9月末日まで)

北海道・ホクレン滝川スワインステーション、(有)山中畜産、ササキSPFファーム、浅野農場、青森県・カワケンSPFファーム、岩手県・全農畜産サービス(株)東日本原種豚農場、(有)ケイアイファウム北上農場、秋田県・全農畜産サービス(株)秋田SPF種豚センター、(株)フカザワ深澤スワインファーム館合農場、宮城県・(株)シムコ岩出山事業所、福島県・(株)シムコ浪江事業所第二農場、(株)シムコ浪江事業所第一農場、茨城県・常陽発酵農法牧場(株)、東京養豚農業協同組合岩井牧場、オヌマファーム、(有)米川養豚場、栃木県・サンエス大渡農場、(有)K&Tコーポレーション、群馬県・(有)小黑養豚、(有)ほそや、(有)畑中畜産、長野県・長野県農協直

販(株)SPF種豚センター、(有)岩垂原エスピーエフ農場、(有)タローファーム、(農)エスピーエフこがねや第一農場、(有)クリーンポーク豊丘農場、千葉県・(有)東海ファーム、埼玉県・(有)松村牧場、神奈川県・(有)横山養豚、静岡県・(株)マルス農場、愛媛県・全農えひめ県本部広見種豚増殖センター、香川県・(株)七星食品多和ファーム、徳島県・日の出畜産(農)、長崎県・第三セクター職業訓練法人長崎能力開発センター、熊本県・(有)高森農場、宮崎県・(株)九州ノーサンファームえびの種豚場、(農)守山畜産、松丸養豚、鹿児島県・(株)シムコ鶴田事業所、(有)長野養豚、(株)九州ノーサンファーム大口農場

(以上41農場)

※次回認定委員会は平成16年12月2日(木)の予定



(有)芳寿牧場
平 芳紘さん
●長崎県口之津町

長崎・雲仙の麓から こだわり続けて

平芳紘さん(62歳)が養豚業を始めたのは昭和48年、母豚30頭の家族養豚でした。それまではみかん農家として、また、家族を支える大黒柱として働き詰めの毎日だったそうです。昭和60年にSPF豚に変換し、母豚200頭の一貫経営に。平成3年には320頭、12年には600頭と、順調に規模拡大を進めてきました。

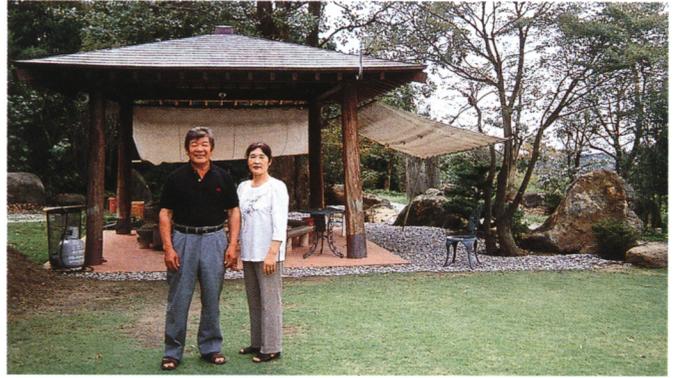
スタート当時は家族経営。分娩・離乳を奥様の良子さんが担当され、分娩当日は豚舎に泊まり込み「生まれた子豚は全て助けるつもり」の管理だったそうです。その結果、1母豚当たり25頭の商品化を達成した年もありました。また、各農場の建設に当たっては平さんが自ら現場監督として造成・建設に従事した結果、外注工事に比べ大幅な経費節減が出来たそうです。

常にどのような方法が一番効率的か、無駄がないかを検証しながら取り組んでいる平さん。中でも一番印象に残っているのは「自分のお金だったら同じ考え方をするか」という問いかけ、ドキッとしました。たとえば、汚れたショベルバケツと綺麗にしたバケツでは1回に運べる量が違う、坂道を車で上るときは運転の仕方でも車の損耗はもちろん、燃料代にまで差が出る等々、1円でも無駄にしないこだわりがうかがえます。



直営店「お肉屋ほうじゅ」と息子の健一郎さん

一方で、農場の防疫面と食材の安全度を高めるためにと、開場当初からの1番と殺・1番カットを継続し



ご自宅庭のバーベキューハウスの前でー

ています。また、生産リスクを分散するために、平成9年には、繁殖農場と肥育農場を別にする2サイト方式を取り入れて農場の防疫及び衛生レベルの維持には投資を惜しみません。約3年前から月例の生産会議を実施、従業員全員が農場全体を理解するよう徹底しています。

一方、販売面では、SPF生産スタート時からの口コミでの地元販売が拡大し、現在は長崎市内まで広がりを見せ、多くのリピーターに支持されています。

一昨年、芳寿牧場の原点である口之津町に「お肉屋ほうじゅ」を開店、息子の健一郎さん夫婦が担当しています。さらに自宅の中庭にはバーベキューハウスを設置、地元の子供会や少年野球チームなどに大人気で週末は2ヶ月前から予約が殺到し、日程調整に苦慮しているところです。

SPF豚の生産にこだわり続け、地域還元があつての芳寿牧場であることを常々口にされる平さんですが一番こだわっていることは?との質問に真っ先に出た答が「自分の子供や孫に食べさせたい豚肉をつくること」でした。「食」に関する安全・安心がさまざまな場面で強調される昨今、生産者の考える安全・安心と、消費者の求めるそれとでは若干の温度差があるように思います。その中で「自分の子供や孫に食べさせたい豚肉」とう考え方は本当の意味での安全・安心ではないのでしょうか。平さんは、この「こだわり」を今後もずっと持ち続けられることでしょう。

(伊藤忠飼料(株) 笠原 茂)

編 日本SPF豚協会は昨年度は認定制度の改正、今年度は法人化、今後は事務所の移転など大きく変わろうとしています。これを機会に協会を中心に、わが国のSPF養豚をますます発展させるよう、皆様とともに盛り上げていきたいと思
集 います。
ポークセミナーには奮ってご参加いただき、協会に対するご意見、ご要望等もお聞かせください。楽しみにお待ちしております。(哲)

<記事の訂正>

第16号のトピックスの東日本養豚協会共進会の記事で総合最優秀賞の農場名が間違っていました。正しくは(有)ケイアイファームでした。お詫びして訂正いたします。

日本SPF豚協会だより

第17号 2004年10月1日発行(季刊)

発行 日本SPF豚協会

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-2-6

TEL.03-5283-5021 FAX.03-5283-5022

e-mail : j.spf.a@nifty.com

http://www.j.spf.com/

発行人 赤池 洋二

編集人 林 哲